# 書評

## 継体天皇の研究

白崎昭一郎著　県郷土誌懇談会刊
昭和四七年発行　B5版二五〇頁

三上書評

三上一夫

継体天皇は、本県ではむしろ男大迹王として県民になじまれているが、県下の郷土史学界で天皇についての総合的な研究は、従来とかく不十分であった。ところがこのほど白崎昭一郎氏は、天皇についての長年の数々の研究論文等を一冊の書物にまとめ「継体天皇の研究」として刊行した。

杉原丈夫福大教授が寄せた序文のなかで「白崎氏はかねがね、考古学的領域も含めて古代史に深い造詣を有し、耶馬台国問題に関してもかってすぐれた所見を発表している。さらに日本古代史研究の必要上、朝鮮古代史にまで関心を向けている。このような広い視野のもとに継体天皇を考究する氏の論述は、まことに該博かつ快調であって、ただただ敬服のほかはない。」と強調している。確かにこの著書は、従来の単なる郷土史というワクを越えて、日本史上の継体天皇として総合的かつ学問的な研究を加えたものといえる。内容は論稿四編と創作（戯曲）一編計五編からなり、そのあとに系譜、文献、年表等を付けている。

まず「継体天皇考」では、日本書紀の内容を検討しつつ、天皇とその周辺の人々の姿を浮きぼりにする。天皇の年齢的考察からはじまり、即位の事情が必ずしも平和的なものでなかったことを、雄略天皇治世の短縮、顕宗仁賢兄弟の物語のそう入、武烈天皇悪虐記事の創作、継体天皇治世の延長など日本書紀にみる一連の作為的な修正点に着目しながら検証する。ついで男大迹王時代の勢力圏を検討して、即位の背景となる政治・経済的基盤を明らかにする。さらに著者は、継体より欽明に至る四朝の日本書紀の記載に錯乱が多い点を指摘して、皇位継承の問題に鋭いメスを入れるが、継体天皇に従った越前出身者の動向として、「継体崩後、これらの人々は安閑・宣化両帝を援けて、欽明擁立派と対立したであろう。やがて宣化朝の没落によって、彼等は全くその地歩を失い、或いは越前に帰臥したかも知れない。越前人にとっては吉野朝の悲歌にも似た非運の歴史が、ここに隠されているように思われてならない。」と論

じている。つぎに「継体天皇と越前」は、昭和四十四年四月のNHKラジオ放送によるもので、天皇の中央進出の事情や、その施政のなかではとくに朝鮮問題に視点をすえ、朝鮮出兵や筑紫の「磐井の叛乱」などの内憂外患的な諸情勢のもとで、波乱多い劇的な生涯を閉じたことを述べている。

また「継体天皇は実在したか」という一文では、天皇が六世紀の前半に、越前から近江にかけての地方勢力を背景にして天皇の座についた実在の人物であることを認め「一つは、この天皇が現皇室の直系の祖先であることである。萬世一系とはいっても応神天皇と継体天皇の前に王朝の断絶のあることは、多くの史家が認めている。しかし継体天皇以後においては、そうした疑いを挟む余地がない。」と力説する。

「継体朝とその前後—継体天皇新考—」は、著者として継体天皇研究の学問的成果を明確に示すものである。従来の考古学界や歴史学界の種々の研究業績をふまえて、内外の関係史料を丹念に駆使するが、とくに注目されるのは、朝鮮との対外交渉や天皇崩後の内争の具体内容について、鋭い検証のメスを入れたことである。

そしてとかく継体天皇の外交政策の大きな失策と評される任那四県二地の割譲につき、その主な原因として次の三点を指摘する。第一は百済の勢力が著しく浸透して、これらの地方の維持が困難となったこと、第二は百済よりの文化移入をめざしたこと、早くも継体七年に五経博士が来朝、さらに医博士・易博士・暦博士・楽人など来日するが、これらは四県割譲の代償として約束されたものとみてよい。第三は百済からの労働力移入の問題である。（要求を拒否すれば、百済からの労働力の供給がとだえ、わが国では中央豪族が困惑することになる。）

このような事情から任那四県の割譲はやむを得なかったとし、天皇の施政が「妥協と宥和」に終始せざるを得なかった点を明快に指摘する。

そのほか「戯曲　継体天皇」の創作が収録されているが、著者は、「何故に創作をものしたかと問われるならば、論文によって果し得なかった人間的なイメージを求めるためと答えたい。」と述べており、六世紀の日本に生きた継体天皇を中心とした人間社会の力強い息吹きを鮮明に描き出そうとする極めて意欲的な作品だといえよう。

長年にわたる著者の真剣な業績が、この一冊のなかに結集された感があり、とくに朝鮮古代史についての検索が、日本古代史の科学的な研究に極めて重要であることを呈示した点は、高く評価してよい。

（清水中学校長）